CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

中京大学体育学論叢　35-2，123-133　1994

スポーツを考える（その3）セルゲイ・ブブカ選手の棒高跳

安田矩明

1．はじめに

棒高跳と云えば"セルゲイ・ブブカ"がスポーツ界での超スーパースターとして代表され，人間の限界と云われてきた壁を次々と突破，室内，屋外を含めて34回と世界記録を更新しつつある。

現在は30歳（1963年12月4日生まれ）で，ベスト記録は室内の6 m 15（屋外は6 m 13）だが，彼の技術を分析すると6 m 30も可能と思わせる計り知れない総合力を秘めている。しかし，アマチュア・スポーツを誇ってきた陸上競技界も，段々とプロ化される中で，貧しい旧ソ連（現在はウクライナ共和国）に所属する彼はビジネスに徹し，毎回自己の持つ世界記録を1 cmづつ更新しているのだ。

この1 cm更新によって，金額は公表されていないが，何百万円の資金が懐にはいるのだ。短距離のカール・ルイス（アメリカ）まではいかないが，賞金稼ぎでは陸上界では「10本の指にはいる」とささやかれている。

棒高跳のルールでは，勝負が決定して優勝者が決まると，その選手は自分の意志でバーを上げることができる。このルールを思うがままに生かせるのはブブカ選手ぐらいである。記録を1 cm更新した後は，誰が何と云おうが「次の楽しみに残したい」と止めてしまう。

ブブカ選手は失敗しても殆ど毎回世界新に挑戦するので，ファンの期待感が大きく，いつも大勢の観客が詰め掛ける。日本の競技会にも必ず招待されて参加するが，テレビ関係社（招待主）筋では年々要求額が上がっているとのこと。日本では5回世界新をマークしているが，更新の段階で次の高さに挑戦しないことは「スポーツマンらしくない」の批判的な声も耳にはいってくる。

筆者は現役生活，それに長年の棒高跳指導に携わってきて，ブブカ選手の出会いは余りにも強烈で，世界記録突破の場面も8回目撃した。そこで今回はブブカ選手にスポットライトを当て，日本選手の将来性，中京大学の棒高跳の現状を含めての話題を採り上げることにした。

1986年1月15日，大阪よみうり国際室内大会で高橋卓己選手（中京大OB）は18年間の棒高跳現役生活にピリオドを打った。彼は147試合5 m突破という成績を残し，最後の大会も5 mとんだ。

この大会でブブカ選手が5 m 87の室内世界新を樹立して，高橋選手の引退に花を添えた。

写真はその時の記念で，左から高橋選手，ブブカ選手と筆者。

2．ブブカは19歳で世界を制覇

第1回世界陸上競技選手権大会は，1983年8月7日～14日に陸上競技が最も人気のあるヘルシンキ(フィンランド)で開催された。スポーツの祭典「オリンピック」は，政治の介入があって世界の強豪が一場に戦えないことから，IAAF(国際陸上競技連盟)が各国に働きかけて実現したのが世界選手権である。

1980年のモスクワ・オリンピックではソ連のアフガニスタン侵攻に対する抗議で，アメリカ，日本など自由主義国家がボイコットしたが，1983年の第1回世界選手権は，政治介入もなく予想以上の国が参加した。まさに“世界一”を争う世界選手権に158カ国，約1400人の選手団が参加，連日5万人を越す大観衆がスタンドを埋め，当時の興奮は今だに生々しい記憶として胸に焼き付いている。

筆者も日本選手団(選手は男子15人，女子6人）のコーチとして参加，特に中京大学卒の高橋卓己選手の棒高跳に付き添った。補足すると，この大会にはハンマー投げに室伏重信，3千m障害に愛敬重之，マラソンに川口孝志郎，女子ヤリ投げに松井江美と中京大関係者は5人出場した。

さて棒高跳に話を戻すが，予選は27人の選手が出場した。前日まで北欧独特な空が透き通るブルーに輝き，30度を越す絶好のコンディションに好記録が続出していた。しかし，棒高跳予選の12日は朝から冷雨で気温は10度以下にまで下がり，予選開始の時には雨が一段とひどくなって，記録なしに終わる選手がでたりしてひどい展開となった。高橋選手も雨でポールが滑り，最初の5 m 10で失格してしまった。

バーの高さが上がるにつれて，雨足は一層ひどくなり，危険性から一時中断，審判団の長い話し合いの結果，全選手が再度翌13日に予選を行うことになった。高橋選手は救われて再度挑戦することになった。

だが，13日も激しい降雨で，大会最終日の14日午前10時に一発決勝となった。変更につぐ変更で，コーチ，選手も多少いらだっていた。この気持ちを静めるために筆者は，早朝6時に起き，選手村（ヘルシンキ工科大学学生寮）の湖周辺を走った後，プールで泳ぎ，サウナで汗を流すことにしていた。

校内のこの走るコースは距離が約1000 m，幅3 mの砂利路の上に厚いオガクズが敷かれ，30 m間隔に裸電球があって，朝夕多くの一般人もジョギングをやっている。ハダシで走る者，シューズで走る者，弾性があって，選手たちにとっては最高のコンディショニング作りの場でもある（スポーツ施設を考えるとして，次の機会に採り上げたい)。

この同じ時間帯に走り，同じサウナのコースで顔を合わせるのが，ソ連のヘッドコーチでもあり，かって走幅跳の世界記録保持者(8 m 35)のテル・オバネシアン氏であった。東京オリンピック（1964年）の代表以来の知人でもあり，サウナでの話で新鋭ブブカ選手の事を知った。

ソ連は3人の選手が出場，5 m 81の世界記録のポリヤコフ選手，5 m 80のボルコフ選手で，もう一人が19歳の無名のブブカ選手であった。ソ連では8～13位当りの選手で，ソ連選手権で5 m 55で2位に入賞，将来性を評価されて選抜された選手だ。だが，テル・オバネシアン氏の予想では「ブブカは練習で5 m 60をコンスタントにとんでおり，優勝の可能性が強い」と聞き，筆者も注目していた。

14日午前10時の決勝当日は，雨は上がったが5 m前後の強い横風が選手を悩ました。優勝候補に上がっていたアメリカのオルソン選手（室内世界記録保持者）ターリー選手，それにフランスのキィノン選手（ロサンゼルス五輪勝者)が，最初に挑戦した5 m 40を3回とも失敗という大番狂わせがあった。小柄な高橋選手（171 cm，60 kg)も風の影響で5 m 25で19位に終わった。

以上のような悪条件下でも，19歳の新鋭ブブカ選手は一向に風を気にせずに18歩の助走で，5 m 40，50，60，70ととび，優勝をものにした。5 m 60は3回目であったが，その他は全て1回目でとんだ。5 m 70の後，一気に5 m 82の世界新に挑戦，実に惜しい失敗をした。

当時の筆者のブブカ選手の感想を日記で次のように書いている。

「他の選手が助走の持ちタイム２分をいっぱいに使って，強い横風を気にするのに，ブブカ選手だけが，タイムを気にすることなく無造作にスタートしていた。若さもあるが，よほどのスピードと力がないとできないことで，末恐ろしい選手が出現したものだ」

筆者の予測通り，翌1984年の年から快進撃が始まったのである。

３．材質の開発による６ｍ時代の突入

棒高跳で６ｍを突破した選手はブブカ選手とラディオン・ガタウリン選手（６ｍ02＝室内）の両旧ソ連選手しかいない。

陸上競技の中でも，棒高跳ほど目まぐるしい記録が伸びた種目はない。それには材質の影響が大きく，木，竹，金属（スチール，アルミニュウム，ジュラルミン，アルミ・ジュラルミンの合金）グラスファイバーの進出によるところが大である。

簡単に棒高跳の歴史を紹介すると，日本は三段跳と同様に“お家芸”と云われた時代があった。それは竹ポール時代であって，日本の竹は優秀で第二次世界大戦前までは，海外に輸出されていた。

明治時代（1906年）には東京大学の藤井実氏が，３ｍ90の世界記録を出したことが文献に残っている。過去のオリンピックを振り返っても，1928年のアムステルダム大会で中沢米太郎氏が６位（３ｍ90），1932年のロサンゼルス大会では西田修平氏が２位（４ｍ30），望月倭夫氏が５位（４ｍ00），1936年のベルリン大会では西田修平氏が２位（４ｍ25），大江季雄氏が３位（４ｍ25），安達清氏が６位（４ｍｍ00）と輝かしい成績を残している。

中でも西田修平氏は1929年～1936年の８年間に世界ランク10位以内に７回もはいっている。当時の日本製の竹ポールについて西田氏は次のように語っている。

「棒高跳の竹ポールは，竹を切り取って出来上がるのに５年ほどかかった。それは竹の油を自然に枯れさせるために暗い倉庫で５年間，影干しするためで，出来上がったポールは弾性があって，直射日光に当たっても割れなかった」

こうした優れた竹ポールの記録は，別表Ｉの比較通り，４ｍ77の記録が作られたのである。戦後の竹ポールは，年期をかけて作る商人がいなくなって，切り取った竹を火であぶって即席で作るようになり折れる危険性があった。事実，筆者も棒高跳を始めた初期（1952年）には一週間で11本も折って，その恐怖から竹ポールを持てなかったことがある。

表－１　①　ポール材質による世界と日本最高記録

氏　名	材　質	年　代	身　長	体　重	記　録	握りの高さ	100m
ワーマーダム（米）	竹	1942	184cm	83kg	4m77	4m04	10秒6
大江季雄（日）	竹	1937	176cm	65kg	4m35	3m75	11秒2
ブラック（米）	金属	1960	192cm	90kg	4m80	4m05	10秒8
安田矩明（日）	金属	1960	171cm	73kg	4m40	3m53	11秒0
ブブカ（ウクライナ）	グラス	1993	183cm	82kg	6m15（室内）	5m00	10秒2
佐野浩之（日）	グラス	1992	178cm	72kg	5m56	4m60	10秒8

世界も同様に日本の竹ポールが輸入できなくなって，スェーデンでスチール・ポールが開発され，アメリカではアルミ・ジュラルミンの合金ポールが開発されたのだ。しかし，金属製ポールの時代は，グラスファイバー・ポールの出現で約15年ほどで幕を閉じた。

グラスファイバー・ポール（後文グラスポールにする）は，かって竹ポールでとんでいたジェンキンス氏（アメリカ）が「竹と同じような柔らかいしなりのポールが開発できないのだろうか」と着手したのが1948年であった。

だが，オリンピック連勝を続けるアメリカでは，各選手とも豪快な力強さを求め，金属製のポールを好んだ。また，アメリカでは誰が何フィートの壁を突破するかと，各選手に意欲を煽った。表2は各フィートを破った選手だが，竹，金属製のポール時代（1960年頃）では，人間の限界は“16フィート”（4 m 87）と云われ，何人かが挑戦したが破れることはなかった。

表－2 ② 各フィートの壁を突破した選手

氏　名	フィート(記録)	突　破　日
ワーマーダム(米)	15ﾌｨｰﾄ (4m572)	1940年4月13日
ユールセス(米)	16ﾌｨｰﾄ (4m877)	1962年2月2日
ペネル(米)	17ﾌｨｰﾄ (5m182)	1963年8月24日
パパニコラウ(ギリシャ)	18ﾌｨｰﾄ (5m487)	1970年10月24日
ビネロン(仏)	19ﾌｨｰﾄ (5m792)	1981年6月20日
ブブカ(ソ)	20ﾌｨｰﾄ (6m098)	1991年3月15日

※ワーマーダムのみ竹ポールで，他は全てグラスポールで突破。

中でも合金ポールで何度か挑戦したドン・ブラック選手（アメリカ）は，「100年に1人しかでない」とまで云われた選手で，通称“ターザン”と呼ばれていた。身長192 cm，体重90 kg，上腕囲47 cm，100 m 10秒8と資質では他の選手より群を抜いていた。

16フィートの壁を破ったのは意外な選手であった。これまでの筋肉質でがっちりした選手と違って，182 cm，68 kgとひょろっとしたアメリカ海兵隊のジョン・ユールセス選手だったのである。1962年2月2日，ニューヨークのマジソンスケアガーデンのミルローズ室内大会で4 m 88に成功したのだ。

世界のボルターに与えた衝撃は大きく，特にブラック選手は「何のためにこんな努力をしてきたのかわからない。ユールセスが金属製ポールで僕と勝負をし，16フィートを破ったら100万ドルをやるよ」と吐き，この日をもって引退したのは余りにも有名な話である。

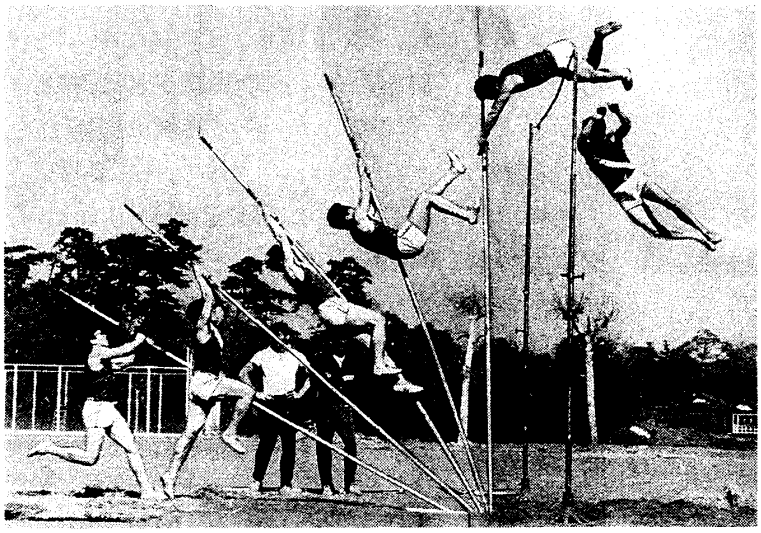
その後，グラスポールの材質は，カーボンファイバーなども導入されて更に改良，記録はどんどん更新され，セルゲイ・ブブカ選手によって6 m時代が到来したのである。

日本棒高跳選手の中で，今さら紹介するまでもないが，最も多くの材質を使用したのは筆者自身である。竹ポールの高校時代（3 m 60＝当時高校ランク2位），大学時代にスチールポール（4 m 40＝日本記録），アルミニュームポール（4 m 20），社会人時代に合金ポール（4 m 30），グラスポール4 m（41＝日本記録）の記録を残した。

右の連続写真は，ユールセスが16フィートを突破した後に来日，彼に交渉して譲り受けたグラスポールとスチール，アルミ・ジュラルミンの合金ポールを使って，筆者自身が被験者（1962年）となったもの連続写真である。握りの高さも同じに設定してとんだが，技術は長年に身につけたスチールポールのとび方であるが，ポールの曲がりがよくでている。既にこの時は筆者自身は一線から退いており，体重も76 kgになっていた。

だが，実験の段階で将来グラスポール時代が来ると予測，1962年4月のシーズン最初の試合で内緒で出場，自己のスチールの日本記録4 m 40を1 cm更新した。当時スポーツ記者であった筆者は，自分をヒーローとして書くことになり，苦労したことを今でも思い出す。

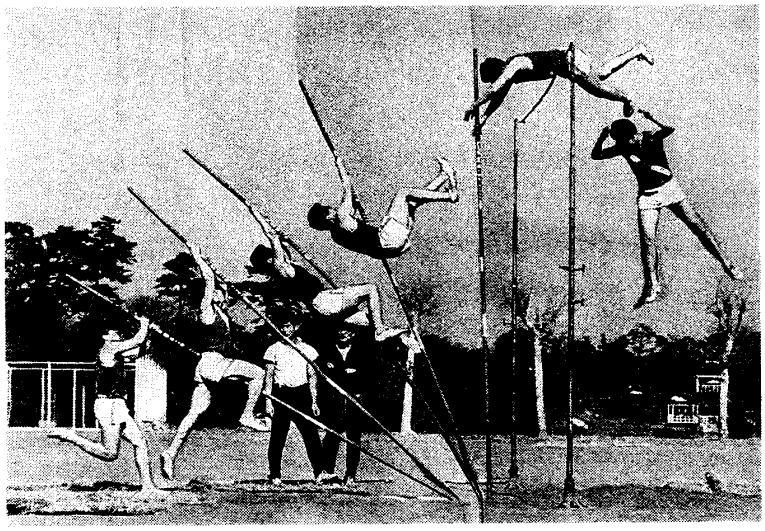
さて，ポール材質は，1964年の東京オリンピックから全ての選手がグラスポールを使用するようになった。その後，アメリカ商法とも云うべきか，オリンピックごとに材質の色をかえ，そのかえたポールによって選手が優勝してきた。



1986年1月15日，大阪よみうり国際室内大会で高橋卓己選手（中京大OB）は18年間の棒高跳現役生活にピリオドを打った。彼は147試合5m突破という成績を残し，最後の大会も5mとんだ。

この大会でブブカ選手が5m87の室内世界新を樹立して，高橋選手の引退に花を添えた。

写真はその時の記念で，左から高橋選手，ブブカ選手と筆者。



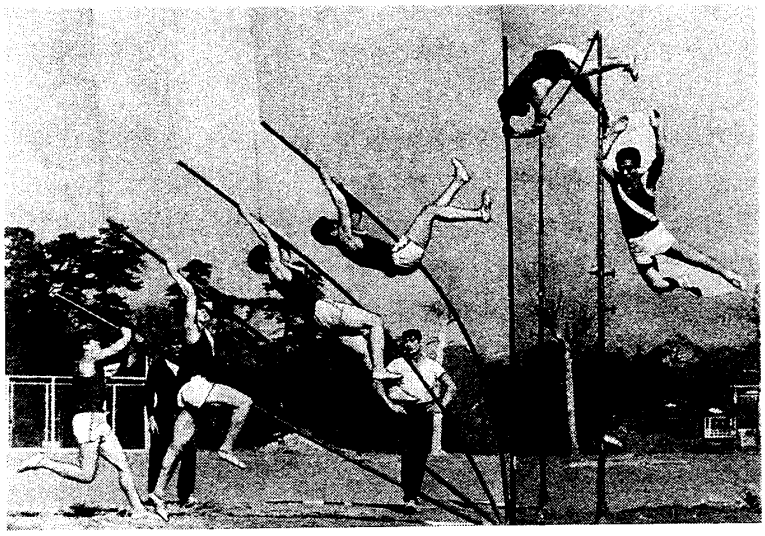
1962年4月，グラスファィバー・ポールが輸入された段階で，3種の違うポールを同じ条件（助走距離，3m50の握りの高さ）で使い，筆者自身がテストをした。

①はスエーデン製のスチール・ポール。ポールは殆んど曲っていない。このポールで筆者は1960年6月に4m40の日本記録を樹立した。

②はアメリカ製のアルミとジュラルミンの合金ポール。1960年のローマ・オリンピックでは大半がこのポールを使用，ブラック選手（米）が4m70で優勝した。多少ポールが曲っている。

③はアメリカ製のグラスファイバー・ポール。使用経験が浅いので，曲ったポールの反発が生かされていない。1964年の東京オリンピックから全ての選手が使用するようになった。

※この当時，日本のピットはまだ砂場であった。



1964年の東京大会は茶褐色，1968年のメキシコ大会は黒色，1972年のミュンヘン大会は緑色（カーボンファイバー）を大半の選手が使用の予定であったが，大会直前に使用禁止となって，メキシコ大会と同じく，黒色となった。この大会でアメリカの18連勝がストップした。

1976年のモントリオール大会は白色，1980年は青色，1984年のロサンゼルス大会は黄金色のポールが登場するが，白色が制覇した。1988年のソウル大会は，白色に赤の螺旋のはいったスピリッツ・ポールでブブカ選手が優勝したのである。

不思議なもので，1980年代以降材質はさほど変わらないと思うが，使用する選手は記録に左右されることが大で，我が中京大学のボルターたちも，同じように時代の流れのポールを求め，使われなくなったポールの処分に頭を痛めているほどだ。

4．ブブカ選手の記録の可能性

筆者がブブカ選手の2度目の跳躍を観戦したのは，1984年2月10日のロサンゼルス・タイムズ室内大会であった。高橋卓己選手をつれての参加であった。本番前の練習でブブカ選手と接する絶好の機会を得た。ブブカ選手は既にこの年の1月15日に5 m 81，2月1日に5 m 82の室内世界新を樹立して，2月10日の大会に臨んでいた。当然マスコミ陣の注目の的でもあった。

いつもより早目に現場に着いた時に，ブブカ選手が現れた。そこへアメリカのグラスポール製作者と関係者が，10本のポールを持参して来た。ブブカ選手用のスペシャルポールを持参したのだ。

この時，製作者がブブカ選手に質問した答えが次の通りだ。

「身長182 cm，体重78 kg，100 m 10秒2，走幅跳8 m 20，走高跳2 m 10…」

ブブカ選手の返答は瞬間違いではないかと耳を疑った。当然質問者も驚いて聞き直した。特に走幅跳の8 m 20は7 m 20ではないかと，すかさずブブカ選手は「ニェット」といい，8 m 20と声を高くした。ブブカ選手は20歳になったばかりである。前年の第1回世界選手権の強風下をびくともせずに5 m 70の自己新で優勝した実力が改めてうなずけた。

走幅跳の記録は当時の日本記録8 m 10を上回るものだし，100 mのスピードも日本のトップ選手とかわらないタイムなので，米国の関係者が驚いたことは当然だろう。

筆者はもう一つブブカ選手の将来を驚異と感じたのは，無償によるスペシャル・ポールの提供だ。今のポールの進歩は，スピード，体重，それに筋力，身長，手の大きさ，曲がるポールの重心の位置など，世界のトップ選手たちは全てが，コンピューターで計算されて作りだされているのだ。（ポールの長さは限定されていない）

残念ながら日本選手の場合，レベルからしてそこまで計算されたポールは与えられていない。一本8万円以上もするポールが，ブブカ選手は特別に作成され，どんどん無償で与えられているのだ。結果はスペシャル・ポールとはいわず，色別されたポールがどんどん世界に売られる仕組みになっている。

ロサンゼルス・タイムス室内大会の結果は，ブブカ選手が豪語するだけあって，5 m 50（2回目）5 m 65（2回目）5 m 75（2回目），世界新の5 m 83は，まだ10 cmの余裕をもって楽々と成功。優勝が決まると次の高さを棄権した。

この時の跳躍を観て，6 m時代は時間の問題と思わせるものであった。

果たしてブブカ選手はどのような環境で育ったのか，まず表－3のブブカ選手が11歳から棒高跳を始めた現在までの年度別の最高記録である。ブブカ選手を発掘し，育てたのはトレーナーのペトロフ氏である。

ソ連での選手発掘には，共産諸国に共通したいくつかのテストが行われる。特に子供の段階では素早い動きが主にチェックされる。ペトロフ氏とブブカ選手の出会いは1973年の秋で，1963年～64年の生まれ子供の中から，ボルター

表－３　③　ブブカ選手の記録の推移

1975年	11歳	2m70
1976年	12歳	3m50
1977年	13歳	3m60
1978年	14歳	4m40
1079年	15歳	4m80
1980年	16歳	5m10
1981年	17歳	5m40
1982年	18歳	5m55
1983年	19歳	5m72
1984年	20歳	5m94
1985年	21歳	6m00
1986年	22歳	6m01
1987年	23歳	6m03
1988年	24歳	6m06
1989年	25歳	6m00（室内6m03）
1990年	26歳	5m90（室内6m05）
1991年	27歳	6m10（室内6m12）
1992年	28歳	6m13（室内6m13）
1993年	29歳	6m05（室内6m15）

表－４　④　ブブカ選手の世界記録の跡

〈室内〉	〈屋外〉
① 5m81（'84. 1.15）	① 5m85（'84. 5.26）
② 5m82（'84. 2. 1）	② 5m88（'84. 6. 2）
③ 5m83（'84. 2.10）	③ 5m90（'84. 7.13）
④ 5m87（'86. 1.15）	④ 5m94（'84. 8.31）
⑤ 5m92（'86. 2. 8）	⑤ 6m00（'85. 7.13）
⑥ 5m94（'86. 2.21）	⑥ 6m01（'86. 7. 8）
⑦ 5m95（'86. 2.28）	⑦ 6m03（'87. 6.23）
⑧ 5m96（'87. 1.15）	⑧ 6m05（'88. 6. 9）
⑨ 5m97（'87. 3.17）	⑨ 6m06（'88. 7.10）
⑩ 6m03（'89. 2.11）	⑩ 6m07（'91. 5. 6）
⑪ 6m05（'90. 3.17）	⑪ 6m08（'91. 6. 9）
⑫ 6m08（'91. 2. 2）	⑫ 6m09（'91. 7. 8）
⑬ 6m10（'91. 3.15）	⑬ 6m10（'91. 8. 5）
⑭ 6m11（'91. 3.19）	⑭ 6m11（'92. 6.13）
⑮ 6m12（'91. 3.23）	⑮ 6m12（'92. 8.30）
⑯ 6m13（'92. 2.21）	⑯ 6m13（'92. 9.19）
⑰ 6m14（'93. 2.13）	
⑱ 6m15（'93. 2.21）	

としてのテストを受けた合格８人の中に10歳のブブカがいたのである。「ブブカには鋭い反射神経と巧緻性が抜きんでていた。また，将来をみこしたパワー面でも光っていた」。

11歳のブブカのテストでは，走幅跳４ｍ20，走高跳１ｍ25，クラウチングスタートの30ｍ４秒６，60ｍ８秒６であったが，反動懸垂を15回した後に，反動をつけないで一回腕力だけで上がったという。

更にペトロフ氏の胆をつぶしたのが，12歳の時に裸足でアルミポールで３ｍ50をとんだこと，それも握りの位置から50cmも高くとんだことだ。その時の感想をペトロフ氏は或る雑誌に「ブブカをほめ，君なら５ｍ80はとべるよ」と口にしたと云う。それほどにブブカ選手は子供の頃から，資質に恵まれた選手だったといえる。

棒高跳は種々の肉体能力を総合する競技で，その後は体操と組み合わせた練習法と，新しい技術開発によって，表－４の世界記録34回を出しつづけているのである。

棒高跳で高くとぶ条件を一言で云えば，ポールを握る高さにある。前述の金属製ポールで世界記録４ｍ80とんだドン・ブラック選手は，身長192cm，体重90kg，100ｍ10秒８であっても，握る高さは４ｍ05であった。握りの高さから１ｍ以上の高さのバーを越すのは技術的にも難しい。

ところがグラスポールの出現と，スペシャル・ポール等の改良で握りの高さがどんどんと高くなってきた。表－５はグラスポール出現後の各オリンピック勝者の体格と記録，握りの高さの比較である。

表の比較でもわかるようにいかにブブカ選手が優れているか，理解できるだろう。ブブカ選手の最高の握りの高さは５ｍであるが，彼のバーまでの高さを抜く技術は，コンピューターの分析によると，１ｍ35は可能という。だとすれば現在の能力でも６ｍ35はとべる計算になる。ブブカ選手に対する記録の可能性の興味はつきないが，一方では30歳という年齢をどう克服するかも話題にされている。

表－5　⑤　グラスポールでのオリンピック勝者

大会（年代）	氏名	記録	身長	握りの高さ
東京　（1964年）	ハンセン　（米）	5m10	184cm	4m45
メキシコ　（1968年）	シーグレン　（米）	5m40	184cm	4m65
ミュンヘン　（1972年）	ノルドヴィック　（東独）	5m50	184cm	4m60
モントリオール（1976年）	スルシャルスキー（ポーランド）	5m50	1m78	4m55
モスクワ　（1980年）	コザキエビッチ（ポーランド）	5m78	1m87	4m70
ロサンゼルス　（1984年）	キノン　（仏）	5m75	1m77	4m70
ソウル　（1988年）	ブブカ　（ソ）	5m90	1m83	4m95
バルセロナ　（1992年）	タラソフ　（ロシヤ）	5m80	1m93	5m00

表－6　⑥　ブブカ選手の主な大会成績

1982年	ソ連選手権	②5m55
1983年	第1回世界選手権	①5m70
1984年	ソ連選手権	①5m80
1985年	世界室内選手権	①5m75
1985年	ワールドカップ	①5m85
1986年	ヨーロッパ選手権	①5m85
1987年	世界室内選手権	①5m85
1987年	第2回世界選手権	①5m85
1988年	ソウル・オリンピック	①5m90
1991年	世界室内選手権	①6m00
1991年	第3回世界選手権	①5m95
1993年	第4回世界選手権	①6m00

5．バルセロナ五輪で敗れた背景

表－6が示す通り，ブブカ選手は主な国際大会で優勝してきた。しかし，誰もが信じた'92バルセロナ・オリンピック優勝は，記録なしという無残な結果に終わった。

この大会には筆者も日本選手団のコーチとして参加，佐野浩之選手（5 m 56の日本記録保持者）に付き添っていた。佐野選手は現地での本番3日前の練習での最終チェックは，これまでにない絶好調で5 m 30も楽々と成功していた。それだけに5 m 60はとべるのではないかと確信していた。

しかし，国際経験の少ない佐野選手は，気持ちのたかぶりから，自己の巻尺で助走距離を確認せず（審判か他の外国選手に頼む勇気がなかった），外国選手の巻尺に合わせた。日本選手はボックスの先端から計るのだが，その外国選手はボックスの手前1 mから測定していたのだ。筆者はコーチとしてスタンドから再計測を指示するが，大観衆の声援に声がかき消され，そのまま跳躍にはいった。結果は助走が合わないため，最初の高さ5 m 20を3回とも走り抜けるだけで終わった。本人にとっては「巻尺が違うはずがない」とスタート地点を10 cm前後だけ動かすだけで，1 mを修正することなく，みじめな敗北となった。

一方のブブカ選手は予選の5 m 60を一発で楽々と成功，2日後の8月7日に決勝へ進んだ。この予選の時点では，誰もがブブカ選手の楽勝を信じた。

決勝進出は12名，当日は選手にとっていやな風が吹いていた。風が回っていて，時には向かい風になるのだ。この風を考えて他の選手は5 m 40，50当たりからとび始めた。

しかし，自信満々のブブカ選手はパスをして，5 m 70から跳躍を開始した。バーが高くなるにつれて風が段々と強くなり，ブブカ選手も助走位置について，スタートをためらった。位置についてから跳躍の持ち時間の2分がだんだんに過ぎ，あわてて助走をしたが，ポールが完全に立たずに失敗した。

19歳の時に見せた無造作に走り出すブブカ選手ではなく，27歳のバルセロナでの助走は，風を気にするいらだちが手にとるようにわかった。筆者自身，ブブカ選手の跳躍を何度も観戦してきたが，この時ほど心の動揺を感じさせた大会はなかった。

１回目の失敗の時，筆者は「ブブカは記録なしに終わる可能性がつよい」と，口にもらしたが，周囲の誰も信じなかった。

筆者が失敗を予言したのは２つの理由があった。一つにはこれまでに信頼しきってきたペトロフ・トレーナーとの別れがあった。真相は定かでないが，共産圏の崩壊によることによって，金銭的なトラブルがあったとも聞いた。二つにはこれまで何度も世界記録に挑戦してきたことで，関係者も期待し，２分というルールに適応せず，彼にだけ許す傾向があった。特に二つ目のことが，いつの間にか自分だけは許される気になっていたと思われる。しかし，オリンピックのルールは厳しく，１，２回とも時間超過寸前にあわてて助走，これでは大選手もとべるはずがない。

気持ちの動揺を押さえるため，５ｍ70の３回目をパススして，５ｍ75の残す１回に賭けることになった。ブブカ選手のあせりはここでも見られ，振り上げの段階でバーを足で蹴落としてしまった。

この結果はブブカ選手にとって大きな反省となり，専門コーチとしてペトロフ氏との仲は戻らなかったが，体操のナショナル・コーチのサラーマギン氏が，その後は付き添っている。ブブカ選手は日頃から「棒高跳は助走から踏み切った後は体操競技だ」と口にするほど，体操を練習に取り入れている。

また，ブブカ選手は共産国崩壊によって，国家の補償がなくなり，家族など数多くの関係者を養わなければならない。それだけに招待で来日しても，生活は派手ではない。こんな場面もあった。

日本では外国選手に対して，選手側からの「食費は金銭でほしい」ということで，金を渡すことがある。アメリカ，ヨーロッパの選手はホテルで食事をするが，ブブカ選手は外食でそれも安価な物を選んで食べている姿に，彼の強さを知ったような気がする。

ブブカ選手はバルセロナ・オリンピックの後，５回の世界記録を樹立していることから，彼の雑草のような強さは今後も記録の更新を続けるだろう。

６．棒高跳の将来

表－７を見てもわかるように，世界では1984年以降殆どブブカ選手がランキング１位の座にある。世界の棒高跳の分布図では，旧ソ連勢が圧倒的に強い，フランス，アメリカの順になる。日本選手のトップと世界とのトップとの差は大きな開きがあるが，世界選手権，オリンピックの８位入賞となると，５ｍ60～70でチャンスがあった。この記録にも日本はあと一歩およばないが，'94，１月現在では５ｍ40以上のジャンプが６人おり，可能性は十分あるとみられている。

表－８は中京大学関係者（OBを含む）の５ｍジャンパーたちだが，日本選手と同じような環境があと一つの壁を突き破れない原因となっている。

①は棒高跳の施設にある。

（かって竹，金属ポール時代には，落下点が砂場であった。グラスポール時代になって，危険性からラバーピットとなった。当初は４ｍ角のマットが，記録の向上に伴い今では７ｍ角のマットが必要となってきた。金銭的には３百万円を越す。各県では国体会場となるような競技場には設置されているが，高価なため練習に使用させない所が殆どである。この悩みの解消のため，我が中京大学で年間に３回の研修合宿を18年前から実施，今までに５千人近い中学生から一般人まで，全国から参加している。結果は中京大学の環境を求めて進学する学生も増え，別表の成績を残しているのである。でも中京大学でも必ずしも恵まれているとはいえない。それは使用頻度が高く，高価なピットが２，３年で破損してしまうからだ）

②は自分にあった高価なポールが入手できない。

（1960年前後の話になるが，当時竹ポールが250円，スチールポールが12,500円，グラスポールが24,000円で，学校の先生の初任給が9,000円であった。とすれば現在の８万円前後

表－7 ⑦ 年度別の日本と世界のランク1位の比較（屋外）

	日本			世界		
年代	記録	氏名	所属	記録	氏名	国名
1962	4.50	山崎国昭	東急	4.94	ペンチ・ニクラ	フィンランド
1963	4.65	大坪政士	日立	5.20	ジョン・ペネル	米
1964	4.80	鳥居義正	東教大	5.28	フレッド・ハンセン	米
1965	4.80	鳥居義正	東教大	5.18	ジョン・ペネル	米
1966	4.95	鳥居義正	吉原商教	5.35	ジョン・ペネル	米
1967	4.96	丹羽清	法大	5.38	ポール・ウィルソン	米
1968	5.15	丹羽清	法大	5.41	ボブ・シーグレン	米
1969	5.10	井上恭一郎	大昭和	5.44	ジョン・ペネル	米
1970	5.16	井上恭一郎	大昭和	5.49	クリスト・パパニコラオウ	ギリシャ
1971	5.10	丹羽清	日立	5.43	シェル・イサクソン	スエーデン
1972	5.10	丹羽清	日立	5.63	ボブ・シーグレン	米
1973	5.10	新谷誠規	順大	5.47	アンチ・カリオメキ	フィンランド
1974	5.11	高根沢威夫	本田技研	5.42	タデウス・スルシャルスキー	ポーランド
1975	5.41	高根沢威夫	本田技研	5.65	デーブ・ロバーツ	米
1976	5.42	高根沢威夫	本田技研	5.70	デーブ・ロバーツ	米
1977	5.30	高根沢威夫	本田技研	5.66	ウラジスラフ・コザキエビッチ	ポーランド
1978	5.30	高橋卓巳	中京大	5.69	マイク・ターリー	米
1979	5.32	高根沢威夫	本田技研	5.65	パトリック・アバダ	仏
1980	5.43	高橋卓巳	土庄高教	5.78	ウラジスラフ・コザキエビッチ	ポーランド
1981	5.46	高橋卓巳	土庄高教	5.81	ウラジミル・ポリヤコフ	ソ連
1982	5.51	高橋卓巳	土庄高教	5.75	デーヴ・ボルツ	米
1983	5.52	高橋卓巳	高瀬高教	5.83	チェリー・ビネロン	仏
1984	5.53	高橋卓巳	高瀬高教	5.94	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1985	5.35	高橋卓巳	高瀬高教	6.00	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1986	5.55	橋岡利行	筑波大	6.01	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1987	5.45	神谷晃尚	デサント	6.03	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1988	5.30	神谷晃尚	デサント	6.06	セルゲイ・ブブカ	ソ連
	5.30	板倉智里	甲府養学校			
	5.30	橋岡利行	日本電気			
1989	5.50	神谷晃尚	浜松北高教	6.00	ラディオン・ガタウリン	ソ連
				6.00	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1990	5.40	神谷晃尚	浜松北高教	5.92	ラディオン・ガタウリン	ソ連
1991	5.50	竹井秀行	中京大	6.10	セルゲイ・ブブカ	ソ連
1992	5.56	佐野浩之	ファースト	6.13	セルゲイ・ブブカ	ウクライナ
1993	5.50	橋岡利行	NEC	6.05	セルゲイ・ブブカ	ウクライナ

※いずれもグラスファイバー・ポールの記録

表－８　⑧　中京大学関係歴代ランキング

記　録	氏　　名	身　長	期　　日
①5m53	高橋卓己	1m71	'84. 5. 6
②5m50	竹井秀行	1m68	'91. 7. 7
③5m40	寺田　博	1m82	'91. 7.14
④5m31	中川一之	1m76	'87. 7.11
⑤5m25	岸　直宏	1m70	'93. 5.09
⑥5m22	大北一成	1m73	'92.10.25
⑦5m20	石川重弥	1m80	'86. 4.27
⑦5m20	安田和宏	1m78	'86.10. 5
⑦5m20	西岡圭一	1m80	'89. 6.17
⑦5m20	森永浩介	1m68	'92. 7.11
⑦5m20	中森　徹	1m78	'92.11. 3
⑦5m20	松井栄清	1m75	'93.11. 3
⑬5m15	稲垣克憲	1m77	'92. 8.16
⑭5m10	冨底利一	1m76	'88. 4.23
⑭5m10	鈴木智彦	1m74	'91. 9. 7
⑭5m10	三宅賢司	1m75	'92. 7.18

のグラスポールの方が安価かもしれない。しかし，記録を狙うには風などの外的条件等を考えると，少なくとも競技会には３本は持参しなければならない。それに前述のように色別による記録によって，選手に新しいポールを求めさせることなど考えると，経済大国日本でもまだまだ入手は困難といえる。最近中京大学では，２名の選手にスペシャル・ポールの無料の提供があった。1991年の事で，このポールによって竹井秀行が５ｍ50をとんで，第３回世界選手権（東京）の代表になった。また，もう一人の寺田博も５ｍ40の好記録をマークした。このように本人に適したポールだと，グラスポールの反発によって予測もできない好記録が出ることだってあるのだ）

まだまだ日本の棒高跳界には問題点が多いが，世界の頂点ブブカ選手まではいかないにしても，筆者は関係者の一人として世界に近付くことを夢みているのである。それにはブブカ選手の強さの秘密，さらには世界と日本の現状を理解してもらうために，話題として紹介した。次の機会には技術の違いを採り上げたいと考えている。